学名と証拠標本の重要性

植田邦彦*

キーワード: 学名, 証拠標本, 国際植物命名規約

Key words: botanical name, voucher specimen, International Code of Botanical Nomenclature

学名を使用するもっとも基本的な理由は、同時代の研究者にもさらに将来にわたっても、各研究者が個別に取り扱った研究材料について、その共通認識を保証するためである。したがって、学名は国際命名規約に従って用い、その名前が適用された分類群の示す概念が後年においてもたどれるように採用しなければならない。分類群はたえず検討され続けており、ある学名のもとに示される分類群の概念が変化したり、逆に学名が変更されたりすることはしばしばある。したがって研究材料は新しい概念のもとでも再検討が出来るように、その証拠標本を永続性のある、一般に使用可能な標本庫に保管すべきである。この手続きがとられて初めて各研究者が個別に行なう研究が客観的で検証可能なものになり得る。

はじめに

科学研究の対象材料には、誰もが一致してその実体を間違いなく認識できる名前を必要とする。この最も基本的な理由から、生物学の場合には、研究材料に学名が与えられる。植物に関する学名は国際植物命名規約 International Code of Botanical Nomenclature¹⁾によって規定されており、学名のあらゆる点での採用、取り扱いはこの命名規約に従わなければならない。この規約の対象は化石、現生を問わず、らん藻を含む植物と菌類である。細菌には別の規約 International Code of Nomenclature of Bacteria²⁾があり、また園芸品種特有の問題等に関する、国際植物命名規約で扱われている範囲以外の事柄については International Code of Nomenclature for Cultivated Plants³⁾もあるが、本論では以下単に命名規約という場合は国際植物命名規約を指すものとする。

もし命名規約に反する名前を採用することによって誤解や混乱が生じたとすれば、それはその名前を用いた者に全責任が帰する。

雑草では分類が困難な群が多く、そのために実体の把握に混乱がみられ、さらにそこに学名上の混乱が加わっていることが多いように感じられる。特に帰化植物等では仮同定の段階のつまずきから混乱が続いていることもあるようである。このような状況を踏まえてこの小論を書くことを試みた。

命名規約の条文を理解することは必ずしも容易ではないが、本小論が少しでも学名の誤解に基づく不必要な混乱の防止に役立てば幸いである。なお、本小論は命名規約のマニュアルとして書かれたものではない。命名規約の原本は英文であるが、近く命名規約の日本語訳が出版される予定なのでそれを参照することをお奨めする。

学名そして命名とはどのようなものか

命名規約の序言の中のもっとも重要なところを引用しておく。

Botany requires a precise and simple system of nomenclature used by botanists in all countries, dealing on the one hand with the terms which denote the ranks of taxonomic groups or units, and on the other hand with the scientific names which are applied to the individual taxonomic groups of plants. The purpose of giving a name to a taxonomic group is not to indicate its characters or history, but to supply a means of referring to it and to indicate its taxonomic rank. This Code aims at the provision of a stable method of naming taxonomic groups, avoiding and rejecting the use of names which may cause error or ambiguity or throw science into confusion. Next in importance is the avoidance of the useless creation of names.

学名とは決してこれ以上のものでもなければ、これ以下のものでもない。具体的にまずいくつかのよく誤

* 大阪府立大学総合科学部生命科学講座
Kunihiko Ueda: How to Adopt Botanical Names and
Importance of Voucher Specimens
(1991年5月17日受理)

解されている点について説明を行なう。

学名という通常 *Magnolia sieboldii* または *Magnolia sieboldii* K. Koch という二名法の形の種名(属名と種小名の組合せ)を思い浮かべるかもしれない。しかし、学名とは種名のみならず *Magnolia sieboldii* ssp. *japonica* オオヤマレンゲ, *Magnolia* section *Oyama* モクレン属オオヤマレンゲ節, *Magnolia* subgenus *Magnolia* モクレン属ホオノキ亜属, *Magnolia* モクレン属, Magnoliaceae モクレン科, Magnoliales モクレン目, Magnoliopsida 双子葉植物綱, Magnoliophyta 被子植物門のように命名規約に従って命名されたあらゆるランクの名前のことである。

分類群 (taxon, 複数形 taxa) という用語はそのランクの如何にかかわらず、またまだ命名されていないものでも、単系統と考えられる一群の生物をさす抽象名詞である。種や属などだけではなく品種、変種、亜属、連、科などすべて分類群である。Cytorace などの種内群や種群、属群などは普通は分類群とは言わないが、それらが分類群として認められる、すなわち自然群として認識できるという結論に達したならば、命名して命名規約上のランクを与えることになる。

ある分類群に命名するということは分類学的な、すなわち生物学的な結論を与えることを意味するが、学名そのものは分類群に対して直接に命名されるものではなく、タイプ標本にのみ命名されるものである。したがって学名にはランクを示す以外のいかなる生物学的な意味も含まれていない。学名はその意味では単なる記号にすぎない。属以下の学名は正基準標本 (タイプ標本, タイプ; Holotype) に対してのみ対応するものであり、また正基準標本はそれが属するところの分類群の典型的な形状を示す必要もない。このことを理解していないことが誤解を招く大きな原因になっている。学名が示すところの分類群の概念は命名した研究者のみならず、以後その名前を採用する研究者個々の責任において規定されるべきものである。したがって、研究者によりひとつの学名の示す概念が異なる場合も、当然おこりうる。繰り返すが、学名そのものは記号にすぎず、一義的に分類群を示しているわけではない。

分類が混乱しているグループの場合には、とりあえず名前のことは棚上げにしておいて、先に実体の把握に努め、分類群概念の整理を終え、それからそのグループに命名されているいくつかの学名のタイプと分類群とを比較の上、学名と実体とを結びつける作業が行なわれる。この場合、前半の作業は分類学的 (Taxono-

mic ; Systematic) な研究であり、後半は分類 (Classification) のための命名上の整理作業である。この前半だけでも後半だけでも問題は解決しない。ヒエ属など、雑草関係でよくみられる学名の混乱や、学名と実体との乖離はこうしたことに原因がある場合が多いようである。

学名の問題は生物学の問題ではないというような安易な批判がよくあるが、それは間違いである。分類学は研究結果を分類体系として表現する責務を負っている。そのために学名の整理が必要な場合があり、結果的に学名が変更されることもある。しかしそのことが分類学の目的では決してない。学名をどう採用するかについてはどのような研究分野であれ使用するものに等しく責任がある。ひとり分類学にのみ学名の使用上の管理責任があるというのは大きな誤解である。

なお、標準名は通称や方言名に対し、日本国内で一般に通用することを目的としてそれらの中の一つを選択したものや、新しく名付けたりしたものである。論文や著作で最初に提唱された名前に従って使用するのが慣例であるが、命名規約のようなものはなく常識的な判断に委ねられている。

同定とはどういうことか

同定という言葉はよく使われる。通常は採集した標本と図鑑等を照合する作業を同定と呼ぶことが多いが、本来は間違いである。同定とはタイプ標本と採集品が同じ分類群に属するかどうかを決定することと言う。言い替えれば同一分類群に分類できることを決定することであり、そのことによって初めて採集品をタイプと同一の名前で呼んでよいことになる。現実にはタイプに直接アクセス可能な場合は稀であり、オーソライズされた情報、すなわち図鑑などで表現されているものと同一かどうかとか、検索表を引くところなる、という方法での検討しかできないことが多いのではあるけれども。したがって同定という日常的な作業自体も、実は分類学的な研究である。なおどのような図鑑等が望ましいかは後述する。

いかに分類群の概念をあらわすか

さて実際にある分類群を命名した場合、その命名者は、少なくとも近代では、そのタイプの属する分類群の概念規定を行なう。例えばあるタイプ標本に *Magnolia sieboldii* ssp. *japonica* という学名を命名し、タイプについての記載を行なう。それに続けて命名者の考えているその分類群の概念にあてはまる個体の変

異の幅などを考慮した、分類群としての記載を行い、同定が確定した各地の標本を引用し、もしノニム（下記参照）があれば引用することなどによりその学名によって代表される分類群の生物学的概念を表明する。したがって、我々が学名を採用する場合、すなわち対象を名前によって呼ぶ時には学名は *Magnolia sieboldii* ssp. *japonica* Ueda in Acta Phytotax. Geobot. 31: 121 (1980) のように命名者と原記載の掲載頁を明示したり、原記載での概念とはかなり異なる概念で使いたい時には *Magnolia tomentosa* Thunb. sensu Ueda (1985) などと引用するのが本来である。こうすることにより、その学名の採用者が表わしたい分類群概念を正確に示すことができる。分類群を再検討したり (revision), 纏めた場合 (monograph) に詳細な異名リスト synonymic list を挙げるのも概念を明白にするためである。その論文における記載などとシノニミックリスト (異名表) をたどることにより、著者の結論としてのその分類群の概念規定が明らかになる。かりに例えば, *M. sieboldii* ssp. *japonica* Ueda in APG (1980), pro. parte (一部分だけ); ……; ABC in Journ. DEF (1981), tantum (だけ) quoad (引用) spec. (標本) jap. (日本の); GHI in JKL Bull. (1982) excl. syn. *M. mno* となっていたとする。この場合は原記載の概念の内の一部だけが著者の言いたい概念に相当し、さらに ABC 氏が DEF 誌で *M. sieboldii* ssp. *japonica* という名前で現わした分類群の概念は大陸に分布するものまで含めていて著者の見解とは異なるので、ABC 氏の概念の内の日本産の標本を引用している部分だけを引用していることを表わし、そして GHI 氏が JKL 報で引用したときには *M. mno* をシノニムに含めているが賛成できないのでそれは除く、ということの意味している。

ただし厳密に問題点を明らかにする場合をのぞけばフルに引用することは煩雑でもあるので、通常は後述するように権威ある植物誌の概念によって学名本体だけを引用するなどの方法が实际的である。もっともある学名がいくつかの概念で使用されてきている場合などは、やはりある程度の修飾語が、誤解を防ぐために必要である。いろいろな表現があるが、“広義”の、“狭義”のをそれぞれ意味する s.l., s.str. や、また上述のように特定の定義によって使いたい場合には *Magnolia pqr* sensu Stu (19xx) などと引用すべきである。

このように学名自体は単なる記号であるので生物学的な議論を行なう過程で、ある分類群について議論す

るなら、そこで使用する学名の概念規定が常に必要になる。それどころか、後に記すようにある学名が、その分類群概念の大小などはともかくとして、常に一つの種類を指しているとは限らないのが現実である。したがって我々はある学名を採用する場合、常にその概念を明らかにする努力を怠ってはならない。本来は命名規約に従った名称を使った場合には、それだけで一義的に何を示しているか判明するのが理想的ではある。しかし我々の研究材料は複雑な実体をもつ生物なのだから、分類学的な研究の進展に応じて変遷するのはしかたのないことである。

なぜ同一分類群に複数の学名が存在するのか

命名規約上、1つの分類群の概念のもとには採用してよい学名はただ1つしか存在しえない。この学名を正名 (correct name) という。さて通常はこの正名以外にもその分類群概念もしくはそれとほぼ同一の概念に対し様々な名前が存在する。これらは纏めてシノニム (同物異名; synonym) と呼ばれる。複数の合法名の中でどれが正名かを決定する大原則は、論文発表と同じ事で、先取権 (プライオリティー) である。非合法名は命名規約上は名前として存在しないので、それはシノニムにはならない。分類群のあるランクで認識すればそれを別のランクで扱った場合もシノニムである。またそれまでは別種と考えられてきたものを合一すれば、そのどちらかの名前はシノニムとなる。属の概念に定説がない科では、ある種が研究者により様々な属に分類されていることもよくあることで、ある1つの見解に立てば他の名前はすべてシノニムとなる。すでに命名されていることを知らずに別途に同じ分類群に属する別の個体をタイプとして命名することもあり、それもシノニムとなる。こうして通常は1つの正名のもとにかなりの数のシノニムがあることの方が普通である。

シノニムはたとえ命名規約上合法的に命名されており、かつそのうえ正名よりも頻繁に採用されている場合でも、あくまでもシノニムに過ぎず、その概念のもとでは採用することは絶対に出来ない。なお、同じ名前を別のものにうっかり命名してしまうこともあるが、その場合後につけたものを later homonym 異物同名といい、これも無論採用してはいけない。

論文で学名を採用するときに概念規定はなぜ必要か

1つの学名が異なった概念に使われてしまった例を挙げる⁵⁾。1913年までシモクレンには *Magnolia obovata* という学名が採用されていた。ところが1913年に出たある論文は *M. obovata* のタイプはホオノキであることがわかったのでホオノキの学名として使用しなければならないと論じた。この時点から大変な混乱が起き出した。この名前を概念規定をせずに学名だけを論文で引用したらどうなるであろうか。1913年の論文が出たからといって研究者すべてがそれに賛成してホオノキの概念で使用するわけではないし、ただ単にそれを知らずに旧来の意味で使用する場合もある。彼らはそれぞれに自分の使用している概念が一般的と考えたからこそ概念規定をせずに使用したのであるが、しかし実はそうではなかったのである。著者が存命中は問い合わせることも出来るが、それ以降は出来ない。他の学名の採用方法などから類推することが何とか可能なこともありはするが、例えば化石についてのある論文では不可能であった。中新世のあるモクレン属植物の化石の類縁を論じているところで、*M. obovata* に近縁とだけ書いてあった。これはもう全然わからない。シモクレンとホオノキでは亜属が違い相当に異なる植物であり、これでは現在の我々にとっては類縁を論じた事にはならない。

なお、現在ではシモクレンの正名は *M. quinquepeta*, ホオノキは *M. hypoleuca* であり、*M. obovata* は非合法名とされている。本論に例として挙げたモクレン属の学名についての議論は本論の目的に沿って相当に改変している。詳しくは Ueda²⁻⁴⁾, 植田⁷⁾ を参照されたい。

複数概念が生まれる原因が安易な命名や組み替え名の採用によることがある。たとえば *Vigna* と *Phaseolus* などのようにA属とB属では属の範疇があやふやで、かなりの種が研究者によりAに分類されたりBに分類されたりし、さらにはAとBとを合一する考えも根強い、としよう。こうした場合には同じ種小名がもともと双方にある場合や、将来そうなりうるケースがあることを認識しなければならない。これまでは普通 *A. japonica* var. *hokkaidoensis* とされていたものを独立種と考える研究者が、*B. hokkaidoensis* という種が存在することを考慮せず、rank priority を考えれば別の種小名が使えるにもかかわらず、*A. hokkaidoensis* と安易に組み替えるかもしれない。この両

属が合一された場合にはこの両種の学名の扱いはやっかいであり、1つの学名が複数の分類群をさす原因ともなる。この例のように、あるグループを命名上の観点から検討せずに学名の問題をいじると将来に重大な混乱をおこすことがある。

学名はどのような場合に変更されるか

学名が変更になるケースには、分類学的な研究が進展することによりそれまでの考え方が変更された結果による場合と、命名規約の改正に伴って変更しなければならないようになった場合、およびこれまで間違っで使用されていた名前の訂正による場合がある。命名規約の序言では次のように記している。

The only proper reasons for changing a name are either a more profound knowledge of the facts resulting from adequate taxonomic study or the necessity of giving up a nomenclature that is contrary to the rules.

以下に具体例を挙げる。

分類学的な見解の変更により生じる学名の変更は当然のことで、この結果生じる混乱は止むを得ない。我々は研究者として生物のありようを追求しているのだから、事実が判明したら従わなければならない。命名規約の目指す学名の安定は言うまでもなく新たな研究の結果生じる変更を拒むものでは決してない。無論、分類群の解析が不十分な段階での命名上の整理や、上記のような安易な組み替えなどは厳につつまねばならないことは言うまでもない。

朝鮮半島～中国東北部および日本産のモクレン属の1種に *Magnolia sieboldii* があり、オオヤマレンゲを指すものとされてきた。ところが、この学名もしくはオオヤマレンゲという和名で通常呼ばれてきたものは大陸産の分類群だけを意味しており、それに対して日本のものは異なった分類群であることが判明した。そして両者は亜種のランクで分類されるべきものと結論された。タイプは大陸産のものであったのでそれを *M. sieboldii* ssp. *sieboldii* とし、日本のものは命名規約上新亜種になるので *M. sieboldii* ssp. *japonica* Ueda と命名した。従来オオヤマレンゲとされていたものは大陸産のものであったが本来オオヤマレンゲとは奈良県大峰山にあることから名付けられた和名なので日本産植物の標準和名とし、大陸産のものにはオオバオオヤマレンゲという新標準和名を与えた。この見解に従えば、日本産のものだけを指す場合には単に *M. sieboldii* としたのでは不十分で *M. sieboldii* ssp.

japonica として引用しなければならない。

しかし、かりに今後ある研究者が日本産のものは大陸産のものと比較して独立種に格上げすべきであると考えたなら *M. japonica* (Ueda) XXXX とさらに名前が変わることも起き得るし、逆に両者は分ける必要のないものだとの結論に達した研究者がいれば両者を併せて *M. sieboldii* に戻ることになる。また、近縁の *M. sinensis* を *M. sieboldii* の亜種に組み替えた研究者がいたが、この場合には上記の場合と異なり、命名法上からは *M. sieboldii* ssp. *sieboldii* に日本のオオヤマレンゲも含まれることになる。

したがって *M. sieboldii* や *M. sieboldii* ssp. *sieboldii* という名前を使用する時には、この内のどの概念で学名を使用するかは採用した者が決定しなければならないし、*M. sieboldii* ssp. *sieboldii* sensu Ueda などと示さないと意味が不明である。

ウコギ科とセリ科は近縁ではあってもそれぞれがよくまとまった分類群で、合一されるようなものではまったくなくと長らく考えられてきた。ところが近年熱帯域の調査が進展するにしたがい、これまでウコギ科の亜科とされてきた2つの分類群の実態が明らかになってきた。それによればこの2亜科は狭義のウコギ科とは相当に異なるもので、もしそれらをウコギ科の亜科のまま取り扱うならばセリ科だけを独立の科としておくことは出来ず、セリ科もまたウコギ科の亜科にすべきであるという見解が出された。この見解に立てばセリ科は定着した名前、概念ではあるが、これだけを科のままに残しておくことは分類学上できないことである。いずれにせよ、ウコギ科という名前を使用するときには狭義、セリ科以外、セリ科を含む、の内のどの概念で使用するのかを明らかにしなければならない。

命名規約の変更による学名の変更は命名規約の存在意義と矛盾する。本来命名規約のもっとも重要で唯一と言ってよい目的は学名の安定化をはかることだからである。しかし命名規約の中の例外規定を撤廃してより一貫性のあるものにするなどの法律的な要因によるものや、時代を反映させた改正など、より命名の現状をよくするために改正が行なわれる。たとえば、現在の規約では1935年以前にはどのような言語での記載であっても許されるが、それ以降はラテン語の記載を伴わない命名は非合法とされその名前は学名としては存在しない。命名規約の条項はすべて過去に波及するので以前の規約では合法に出版された名前であったものが現在では使用できなくなったり、逆に非合法名であったものが合法名になったりすることもある。これは

しかし最小限の必要悪として認めざるを得ない。実際、規約の改正にはたいへん慎重な過程を必要とし、簡単に変更できない。その影響まで含めて長期間の国際分類学連合会誌上、命名小委員会、命名委員会での討議をした後に6年に一度の国際植物学会議で投票の結果、可とされたものだけが変更される。

最近、命名規約をより一貫性のある形にするために autonym (後述) の取り扱いが強化されたが、その結果かなりの数の学名が変更せざるを得なくなった。ミズナラの学名が変更されたという具体例を示し、命名規約上の他の取り扱いかたの説明も交える³⁾。

ミズナラとモンゴリナラとを変種関係と考えた場合ミズナラには *Quercus mongolica* var. *grossoserata* (Bl.) Rehd. & Wils. との学名がこれまで一般に採用されてきた。しかし、この名前は現行の命名規約では使用出来ないことになり、autonym に基づく *Q. mongolica* var. *crispula* が正名となる。なお、この場合これらの学名の元になる *Q. crispula* も *Q. grossoserata* も、極端に細かくみるのであれば、双方とも同じくミズナラである。

さてこの var. *grossoserata* (Bl.) Rehd. & Wils. は *Q. grossoserata* Bl. からの直接の組替えではなく、*Q. crispula* var. *grossoserata* (Bl.) Miq. に基づいている(この場合 Rehd. & Wils. がそのことを意識していたかどうかは関係がない。命名規約の対象はすべて結果だけである)。なぜならプライオリティーはランク毎に考えるという rank priority の概念があり、ミズナラを *Q. mongolica* の変種と考える時には、もし存在するのであればどんな種の変種とされていてもミズナラを示す、すなわちミズナラがタイプである最初の変種小名をもってこなければならないからである。仮にミズナラの学名 *Q. mizunara* (仮名) が種名としては一番古く、かつたとえ種としては正名であっても、var. *grossoserata* がすでに発表されておれば、*Q. mongolica* var. *mizunara* とはできない。後者はミズナラが変種としては過去に一度も扱われていない場合にのみ合法である。ただし、rank priority があるからといってむやみに新しい名前をつけるのは混乱を招くので好ましくない。

さて *Q. crispula* var. *grossoserata* が発表されたとき、同時に *Q. crispula* のタイプに基づく var. *crispula* も命名されたと分類学的にも命名上からも、考えなくてはならない。これを autonym 自動的同名という。これは当然の事である。新変種であろうが、別種との合一であろうがそれまでの種の概念に変種が

付け加えられれば、それまでの狭義の種概念は自動的に変種になる。一方、新しい広義の *Q. crispula* の種概念は従来の狭義の種概念、すなわち *var. crispula* と *var. grossoserata* との合わさったものになる。なおこのような場合、モンゴリナラ=*Q. mongolica* とするのはおかしく、本来は *Q. mongolica* *var. mongolica* としなければならない。新 *Q. mongolica* には必要なら新たに和名をつけなければならない。

さて、最近規約が改正されて *autonym* の考えが強化され、*autonym* がたとえその時点で印刷は一切されていなくとも、実際に命名されたものより *autonym* の方にプライオリティーがあることになった。この場合上記のように *grossoserata* と *crispula* とは同一分類群と考えられるので、したがって、ミズナラを示し得る変種小名としては *grossoserata* ではなく、*autonym* である *crispula* が一番古い変種小名となる。したがってミズナラの学名は *Q. mongolica* *var. crispula* (Bl.) Ohashi が正名となる。

ここで紹介した考え方は、もちろんミズナラをモンゴリナラとは別種と考えたり、亜種関係と考える立場では異なってくる。上記の例はあくまで1つの分類学的立場からの正名の例である。ところでこのような場合慣習的にミズナラはモンゴリナラの変種とか、ミズナラの母種モンゴリナラとか表現するが、両者は対等な分類群である。たまたま *Q. mongolica* が先に発表されていたから「学名上の母種」となっただけである。種分化の問題とはまったく関係がない。

なお *autonym* には命名者名をつけない。*Magnolia sieboldii* K. Koch ssp. *sieboldii* や *Q. crispula* Bl. *var. crispula* には命名者がいない。同様科以下のすべてのランクでも同様でモクレン科 *Magnoliaceae* のタイプを含む *Magnolioideae*, *Magnolieae*, また *Magnolia* L. の亜属、節である subgen. *Magnolia*, sect. *Magnolia* にも命名者名をつけない。しかし、もしその *autonym* に複数の概念が存在しうるのであればはっきりさせるためには例えば *M. sieboldii* ssp. *sieboldii* sensu Ueda という書き方をする。

広く採用されている学名は規約に反しても残すべきか—学名の利用者の立場—

学名は単なる記号であることを強調した。であるならば、とにかく自分の知っている学名を使用すればよいのであろうか。これは無論他の研究者に通用しないことが多く、してはならないが、現実には結構よく見受けるところである。特に、一般によく使われてきた

学名が変更になった、または学名の意味するところが変わったなどという場合には、それを知っていてもこれまでの名前または古い概念で使用する研究者が多いのが実際であろう。当座は一般に通用する。しかし、これとて、その研究者の思う“一般”とは本当に一般であろうか？ 一見混乱がおきないからといって正名以外の学名を使用しつづけて本当によいものだろうか？ 少なくとも将来には通用しなくなるであろう。

一般に広く採用されていた学名が変更になる場合は混乱もまた大きなものになる。上記の *M. obovata* の例もその1つである。このような変更による大きな混乱を避けるためにいくつかの例外規定がある。属名、科名の場合は一般に広く安定して採用されていることが証明できれば“突然”再発見されたより古い名前を、先取権という大原則に反して、使用しないことや、命名規約に合わない名前を残すことが可能である。

シキモドキ科の学名は *Winteraceae* であるが、*Wintera* という属名は *Drimys* に対する余剰名であるため現在では非合法名とされ使用できない。したがってこの科名はタイプメソッドに反する名前である。しかしこの科名は一般に広く使用され変更すると大きな混乱を招くとして *Winteraceae* は保留名とされ、正名として扱われることになっている。

科名の保留についての議論はほとんどないが、属名では議論百出である。しかし、最大の問題は種名でどうするかである。近年コムギやトマトなどの主要作物に命名規約に従えば学名の変更を要するものがあることが判明した。このため命名規約を改正する唯一の機会である国際植物学会議の度に種名での保留名についての議論が繰り返されてきた。そして最近とうとう、経済的に重要なものに限り種名の保留名を認めることが小差で可決され、コムギ、トマトの学名は使用されることができるようになった。

一見この種名の保留名は現実に即したよい考え方のように思える。学名の出発点であるリンネの命名による名前では以後一貫して採用されてきた名前であるのに、タイプをよく調べてみたらこれまで適用されていたものとは違う植物であったという例が近年かなりみつかった。この場合は拒否名としてその学名は使用してはいけませんが、安定して採用されてきた名前を本当に拒否してよいのだろうか。分類学の論文を参照しなければならない“学名の利用者”である人にとっては学名の変更はやかかいであり、その意味で今一般に広く使用されている学名が固定されればそれに越したことはないと考えるのは常識的な考え方である。

しかし、本当にそうであろうか。ある分野では一般であっても他ではそうではないこともある。例えばモクレン科オガタマノキ属のギンコウボクの正名は *Michelia* × *alba* であり一般に採用されているが、日本の園芸学関係だけではシノニムである *M.* × *longifolia* が通常使われている（×は雑種分類群を示す記号）。まして、保留名の規定がされていない現状で各分野個別に“一般性”があるからと間違った名前の使用を続けると、分野別の方言を生むことになり、学名の意味はなくなる。では、保留名の設定にむけて努力すればいいのであろうか。残念ながら答えはノーと言わざるを得ない。

例えば日本産植物の学名が日本では正しく混乱なく一貫して使用されていたのに対して、それを花木として栽培していた欧米では長く別の学名で呼んでいた、というような例がある。このような場合、園芸上は後者の間違った学名の方が一般的だからといって日本でまで後者の学名で呼ぶとしたらどうであろうか。これは当然欧米での採用名をどのような理由があろうと正しい学名に変更させるべきである。この場合に起るであろう混乱は仕方のないことで、2種類の学名が通用しているという異常な事態こそ問題である。ところが現実にはこのようにものごとが進行するかどうか分からない。命名委員会で議論に挙がったときのことを想像してみる。おそらくは欧米でのその名前の使用文献量が圧倒的に多く、一般性が証明されるであろう。上記の“経済上重要である”という条項が拡大解釈されれば花木となっているものは無条件にその名前が優先されるかもしれない。研究者人口、特に命名規約への造詣の深い研究者の数を反映し、命名委員会には日本に限らずアジア出身の委員はきわめて少数である。したがっておそらくよほどがんばらないと欧米での学名が正名とされることになる。

もう1例考えてみよう。ある作物は長らく *C* という属に分類されていた。ところが分類学的な研究の結果、明らかに *C* という属は成立せず *D* という属に含めるべきであるという結論に達した。この場合 *C* という学名に固執することは、*D* を使用することがいかに慣習に反するとはいえ、科学的ではない。*C. sativa* という名前を残したいからといって *D* 属の種までも含めてすべて *C* 属に組替えて保留することは非常識である。

このように考えてくると、種名の場合には保留名はむしろ混乱を招くのではないだろうか。そして、ある名前を保留名にすべきかどうかの議論がえんえんと続くことになる。やはり、命名規約にはなるべく例外規

定は持ち込むべきではない。原則の貫徹に伴う多少の混乱は全体の学名の安定のために容認せざるを得ないのではないか。保留したほうがよいというような例は目立つものである。しかし、考えなければならないのはほとんど全ての学名は命名規約のもとに現在の安定した状況があることである。むしろ、実際に生じている混乱の多くは上記に示した *Michelia* × *longifolia* のような例である。

学名の採用は、では具体的にどうすればよいか

いずれにせよこのように学名を正しく使用することは困難ではないにせよ、容易でもない。そこで植田⁵⁾ は以下のような現実的な方法についての提案を関連分野の研究者に行なったことがある。

本来学名はすでに述べてきたように命名規約に従って採用すべきものであり、ましてや個人的な好みのレベルや、個人的な判断で“この名前は一般的に採用されている”と考えて安易に使用すべきものでは決していない。しかし、専門家ではないが学名はよく使用するというような立場の研究者が常に細部にわたって厳密な検討を行なうことは現実には無理であろう。そこで次善の策として考えられるのが、論文で採用する学名すべてをなんらかの権威ある、後年にわたって参照が可能な植物誌や図鑑に典拠を置くことである。具体的には自生種子植物に関しては植田⁶⁾ に挙げた、大井(1978)：日本植物誌改訂増補新版(至文堂)、北村他(1957~1979)：原色日本植物図鑑シリーズ(保育社)、佐竹他(1982~1989)：日本の野生植物シリーズ(平凡社)のどれかを用いるべきである。このことにより引用する個々の学名の概念を著者本人がいちいち決定し、表明する必要がないことになるし、なによりも他の研究者がその論文で採用されている学名の概念を容易に把握可能となる。この場合でもその典拠した文献に採用されている学名が正名でないことはありうるが、概念規定が明確なのだから、技術的にそれを正名に読み変えることができる。もちろん、直接の研究対象種をはじめ、典拠した植物誌の考え方と異なる概念で使用したい分類群に関しては当然個々に著者が責任をもって概念規定をしなければならない。もっとも雑草によくみられるような帰化種や栽培植物、園芸植物については典拠すべき著作が少ないのが現状であり、早急な整備が強く望まれる。

一方、近年自然保護のための資料作成などさまざまな理由で、学名を利用する機会が急速に増大している。

そのために命名規約に完全にのっとった形だけではその一般への普及に時間がかかり、かえって混乱を招く恐れが現実のものとなりつつある。命名委員会でもこのような現実に対処するために上記のような方法を拡大し、とりあえずこの名前を使用すればよいというようになりリスト作りが検討され出した。しかし、当面は日本では一応完成された植物誌が幸いにあるのであるからそれに従っておくのがよい。

学名は便宜的に決めるべきときもある

植物相の整理が進んでいない地域などでは、分類は細かい方がそれだけ情報量が多いので、その群の変異の考察などの出発時には役立つことが多い。ところが近年ヨーロッパの研究者に種や属を非常に大きくとる風潮がある。こうした分類が実際にどのような混乱をもたらすか、いくつかの実例を挙げる。

最近、モクレン属に近縁な *Talauma* 等いくつかの属をモクレン属の亜属や節として分類する説が発表された。しかしそれぞれの分類群の範疇には変更はなかった。このためこれまでは植物相のよくわかっていない熱帯地域などでは、この群の分類のキーキャラクターであった成熟した果実を採集する努力が行なわれていたのに、すべてモクレン属であるならということで努力しなくなる恐れがでてきた。この例のように識別点が明白でかつ分類群としてよくまとまっているものを合一する理由を私は理解できない。

東南アジアからヒマラヤ地域に分布するイジュ属はこれまで7-8種に分類されていたが、これを1種にする考えがある。種概念としてそのように結論したのであればそれはそれでよいかもしれないが、しかし、1種にまとめた研究者も地域毎のまとまりを否定はしていない。現実に沖縄のイジュと小笠原のヒメツバキは一見したところ相当に異なるし、ジャワ低地での30mを超える大木とボルネオ高地の1m以下の矮小低木との間が完全に連続するわけでもない。

このような例の場合には分類学的な問題点とは別に、実際上の問題としてたとえばチェックリストに学名だけがあがっている場合でも、大きく取った学名より細かい方が、この地域にはこの型が分布するなどの情報が得られるわけで、考察の出発点としては便利である。学名を利用する側にはそれらすべてを同属もしくは1種とすることによるメリットは何もなく、ローカルフロラなどを考察するときなどには害になるだけである。このように考えると分類学的に属や種をわけていることの矛盾が示されていない属や種の合一は、学名の利

用者にとってはむしろ弊害が大きい。

一方、マメ科を3科に分ける考えがあるが、分けたところで隣に位置するものであり、これまでの分類体系ではマメ科から遠く離れたものと実は近縁であることが確定され、分けなければいけないということになったわけではない。今までのマメ科の範疇は大きすぎるということと、3群が互いにかなり違うものであるということだけが理由のようである。とすれば、いたずらに科の数を増やす理由があるのだろうか。モクレン属の場合とは逆に細かくすることによる弊害の方が大きいと思われる。

分類系は通常あくまでも分類上の整理のためのものである。個々の分類群の概念や系統上の位置を正確に知る必要があれば、それは個別に論文を詳しく読めばよい。ウコギ科での例とは異なり、研究結果と矛盾がないのであれば分類系そのものは出来る限り現実に即し、利用する側の立場にたって便宜的、保守的であるべきである。いずれにせよ、こうした場合、使用した学名の概念を示さないと、どの概念で学名を採用しているのかが不明である。

証拠標本的重要性

科学論文に発表された結果は常に再検討が可能でなければならない。再検討（追討）するとき、生物学の場合では解析方法の問題の他に対象生物の問題が存在する。それを可能にする唯一の方法は正しく学名を使用するしかない。しかし、後年、現在の常識とは異なった環境で再検討することを考えていただきたい。問題は2点ある。まず、*Magnolia obovata* で挙げたような例である。この場合研究対象が *M. obovata* とだけ記述されその分類群の概念が示されていないかったら、再検討は困難となる。もう一つは避けがたいこととしての同定間違いと分類群概念の変更である。これも再検討は同様困難である。場合によっては不可能ですらある。これをさける方法はただ1つ、その研究に用いた材料を証拠標本として永続性のある標本庫に保管することである。そして論文にはその保管標本庫を必ず明記し、さらに標本の方にはその引用論文名を添付することが望まれる。後年の研究者は疑問が生じた場合、その標本を検討することにより疑問点を解決することができるが、なければ結局こうではなかったか、という推定しかできないことになる。下記に例を挙げる。

コモウセンゴケ *Drosera spatulata* Labill. には近似したトウカイコモウセンゴケ *D. tokaiensis* (Komiya & C. Shibata) T. Nakamura & Ueda という

種が存在するが、後者は最近までほとんど知られておらず、さらに1977年以前には分類学上はトウカイコモウセンゴケという分類群は存在していなかった。すなわちコモウセンゴケしかないと思われていたのである。東海地方の植物相を研究する際にこれまでの文献を調べたが例外をのぞきトウカイコモウセンゴケへ言及した文献は無く、過去の文献からトウカイコモウセンゴケの分布を調べることは出来なかった。ところが実際には東海地方にはコモウセンゴケはほとんど分布せず、大半がトウカイコモウセンゴケである。一方、コモウセンゴケ類が生育する低湿地は急激に減少しており、過去の分布域を現況から推定するにはかなりの困難がある。にもかかわらず保管されている標本は多くはない。このような場合、いかに多くの詳細な文献があろうと無意味である。少ないとはいえコモウセンゴケも分布しているのであるからすべてをトウカイコモウセンゴケに読みかえることはできないし、また文献のコモウセンゴケを現在の意味でのコモウセンゴケと考えることも出来ないからである。このような例は世界的に最も調査の進んだ地域である日本でもまだまだ相当におこりうるケースである。このような時、後に判明した事実に基づいて考え直すには、標本を検討するしか方法がないのである。

技術的に同定が困難なグループとしてはイネ科、カヤツリグサ科やキク科などが挙げられる。特に文献や標本があまり日本にはない帰化雑草のような場合にはなおさらで、これまでの文献や情報でも多くの同定間違いがある。これらの同定間違いをしたものを対象に解析が行なわれた場合どうなるであろうか。現地においてもすでに姿を消していることはよくあることである。このような場合も標本さえ残っていれば、たとえば引用名とは別種であったとしても、そのデータは別種のものとして読みかえることなどができる。また、栽培品種の場合には品種そのものがなくなることすらある。雑草には複雑な遺伝子流動や浸透交雑を日常的

に行なうものもあり、外部形態からつけられた学名はその当時には例え正しく同定されていても将来には価値が低くなる場合もある。同定は正しくとも乏しい文献のために間違った学名を採用し続けていることもある。このような場合にも証拠標本があれば対処は可能である。

おわりに

分類学の専門家でない研究者が学名の取り扱い法に精通する必要はないかもしれないが、学名とはどのようなものか、特にその採用の方法についての基礎知識は必要不可欠である。この小論では論文にいかに関学名を採用するか、そしてその基礎として学名をどのように取り扱うべきかについて具体例をまじえて示してみた。科学者である我々が取るべき道はそう多くはないことを理解いただければ幸いである。

神戸大学の渡辺邦秋教授には草稿を綿密に読んでいただきました。ここに記して感謝いたします。

引用文献

- 1) Greuter, W., ed. 1988. International Code of Botanical Nomenclature. Koeltz, Koenigstein, pp. 328.
- 2) Ueda, K. 1985. A nomenclatural revision of the Japanese *Magnolia* species (Magnoliac.), together with two long-cultivated Chinese species III. *M. heptapeta* and *M. quinquepeta*. Acta Phytotax. Geobot. **36**, 149-161.
- 3) Ueda, K. 1986a. *ibid.* I. *M. hypoleuca*. Taxon **35**, 340-344.
- 4) Ueda, K. 1986b. *ibid.* II. *M. tomentosa* and *M. praecocissima*. Taxon **35**, 344-347.
- 5) 植田邦彦 1990a. 学名を論文にどう採用するか. 植生史研究 **5**, 56-58.
- 6) 植田邦彦 1990 b. 日本の植物誌, 図鑑類. 植生史研究 **6**, 13-14.
- 7) 植田邦彦 1990c. チュンベリーが記載したモクレン属植物の命名上の問題点. 植物研究雑誌 **65**, 17-24.